

St. Luke's International University Repository

哀悼:常葉恵子先生

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2021-03-12 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10285/705

This work is licensed under a Creative Commons
Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0
International License.



—— 初代理事長常葉恵子先生御講演再録 ——

聖路加看護学会への期待

第1回聖路加看護学会学術大会会長

常 葉 恵 子

第1回の学術大会の会長に推されましたことを心から感謝いたしますとともに、その責任の重さを心底から感じております。

聖路加とのかかわりは、学生時代を含め52年の歳月になることを今更のように思われます。そして、この看護学会への期待を私の経験を通してお話しし、学会のスタートとさせていただきます。

この聖路加看護学会の目的は、聖路加看護大学の建学の精神を継承し、実践を重視した看護の学的体系化にあります。この目的を2つに分けてみました。ひとつは、建学の精神の継承であり、もうひとつは実践を重視した看護の学的体系化であります。

今回は、建学の精神の継承の視点から、次の4つの時代を紹介しつつ、聖路加看護学会への期待をお話しさせていただきます。4つの時代とは、Dr. トイスラー来日とその時代、終戦当時の混乱期、大学院博士課程の誕生、そして新校舎建設の時です。

これらは本学の歴史の中でひとつの転機であり、本学の存在が真剣に問われた時であると考えました。また、個人的に私自身もそれらの多くの時代を共有して参りましたのでそれぞれの時代の具体的出来事を交えながらお話しし、今後の学会の発展にお役に立つことを心から願っております。

【建学の精神の課題】

本題に入ります前に、建学の精神とは何かを考えてみたいと思います。学生便覧に「聖路加看護大学はキリスト教精神に基づき、看護を志す人々が、より豊かな知性と感性をともに追求し、看護専門職者として成長することを目的としている」と書かれています。

この中で最も中心となる事柄は「キリスト教精神に基づき」という点であると思います。このキリスト教精神に基づくとはどういうことでしょうか。ある意味では愛の精神であるということになります。しかし、それを支えるにはいくつかの柱となる考えがあると思います。

通常、人間は、身体的・精神的・社会的側面を持つ存在であるといえます。しかし、本学の理念には、それに

霊的側面をもつ存在であると明記されています。

この霊的存在とは、人間自身では計り知れない、又動かすことの出来ない何ものかが自分の中にあり、又何者かによって支配されている存在であることを意味すると考えます。キリスト教徒であれば、そこに神、またはキリストの存在を考えるでありましょう、またキリスト教徒でない人も、人間として自分達の及ばないものを謙虚に考える、またそういうことを認めることだと思います。この霊的存在を認める時に、人は人との対応の仕方が変わってくると思います。

人間は、それぞれ何か得意なものがあります。それを与えられた賜物と考えたり、或いは、素質というかもしれません。そして、それを十分に生かし、高めていくことが求められています。更にこれを自分と同様に他の人にも認めること、これが霊的側面を具現化していくことになるといえましょう。

私達が、看護を賜物として持っているならば、看護とは何かを問い求め、さらに高め進めていく責任があると考えます。

人間の行為の最終目標は、各人のもつ信念によって形づくられると考えますが、聖路加の目標は「神の栄光と人類奉仕のため」という大目標が示されており、このことが継承すべき本学の精神の中心課題であると考えられます。

【Dr. トイスラーの来日とその時代】

ルドルフ・B・トイスラーは、アメリカで有能な働きをしておられましたが、与えられている医師としての賜物をもっと神の栄光のために用いられることを願い1900年（明治33年）に聖公会宣教医師として来日されました。

そして、日本の医療を見たとき「日本は医学の科学や理論に関して世界に遅れをとっていないが、その知識を病人のケアに適用する点でははるかに遅れている」と驚き、「応用医学の真髄は、訓練された看護婦のサービスであり、近代的病院或いはクリニックの成功は、まさに看護婦スタッフの技術にかかっている」と明言されました。

そこで、近代的病院の建設と同時に、質の高い看護を提供できる看護教育機関を作ることを決心され、計画を

この原稿は、1996年9月15日に開催された、第1回聖路加看護学会学術大会において講演された内容を再録したものです。

進められました。

まず第1に将来の看護指導者の教育を考え、荒木いよ女史を米国の正規の看護教育を受けさせるために留学をさせたのです。その後、本格的に看護教育を実施するために、米国より看護教育に豊かな経験を持つアリス・C・セント・ジョンを1918年に招き、彼女を校長として看護婦教育が1920年に開始されました。

トイスラーは、聖路加の卒業生が米国でも認められるようにNursing Collegeを意図したカリキュラムをたて、教育が始まりました。

トイスラーは、看護の質を高めるための教育を優先されましたが、その教育目標は、一貫して「本邦における看護職の標準を向上させる」ことであり、聖路加国際病院の看護婦を養成するという表現はひとつもないのです。トイスラーが、如何に日本全体の看護を考えていたかが良くわかります。

また、トイスラーは、看護を臨床・公衆衛生看護と総合的にとらえ、公的機関にのみ援助をしていたロックフェラー財団に働きかけ助成金をいただきました。

それは、旧校舎の建設などの教育基金援助と留学奨学金であります。留学をした卒業生は20名にのぼり、その中に河村郁・湯楨ます・前田アヤ・高橋シュン・金子光先生など多くの看護教育や公衆衛生看護の指導者が含まれています。

【終戦当時の混乱期】

昭和19年に入学した私にとって、まさしくこの時代は私の歴史であります。当時、学徒動員として「いかにして大空襲にあった人々の救護にあたるか」ということで終始していました。

昭和20年8月15日に、全学生が大教室に集まり戦争の終結を湯楨ます先生から告げられました。沈黙と静寂が教室全体をおおったのを鮮明に記憶しています。湯楨先生は「看護婦をめざす学生として病院に残されている病人や戦災傷患者の方々の看護に力をかけて欲しい」と話されました。その時4年生の隊長が思い詰めた態度で「先生、私たちの生命は保障されますか」と勇気を持って発言しました。先生は静かに下を向いて暫く考えられ「本当にそうですね。あなた達の生命は保障できません。即刻自分の家にお帰りなさい。そして、東京在住の方々に私たちに力をかけて下さる意志のある方は協力をお願いします」とおっしゃられました。私たちは学生として大切にされていました。そしてこの湯楨先生の言葉の中に聖路加のひとつの流れとして学生を大切にしていることの表れがよく読みとれるのです。

病院と学校の建物はすべて米軍に接収され、無期限休校になり学生は自宅待機となりました。昭和20年12月に再開され、昭和21年からはGHQ指導のもとに日本赤十字社の看護婦養成所と合併して東京看護教育模範学院が設立いたしました。この期間は両校にとって戦後の

希望の時であり、又混乱と試練の時であったと想像されます。

その状況を湯楨先生の著書であるグロウイング・ペインに次のように書いておられます。「模範看護学院が発して1年もたった頃、聖路加と日赤の2つの学校をひとつにまとめるようにという占領軍からの指導ができました。結論は、合併に反対でした。第1に、聖路加の建物は永久に接収されるわけではありません。いつか築地に帰る日がくること。第2にそれまで聖路加と赤十字には異なる歴史と理念があり、日赤には日赤の立派な看護があり、一方聖路加の方はキリスト教の信仰から発した看護があり、それぞれの良さをそれぞれが生かすことを考えればよいのであって、足して二で割るという考え方はどちらも生きてこないと思ったのです」

私は、この時、もし司令部の意見に従っていれば、現在が変わっていたと思います。この2つの違った歴史のある学校がそれぞれの良さを持って将来進んでいこうと明確に示された湯楨先生の偉大なる決断に感慨深い思いをもっております。

【大学院博士課程の誕生】

1983年(昭和59年)に博士課程設置についての準備委員会が発足しまして、1986年に第1回目の申請を文部省に提出、受理されず、1987年に第2回目の申請が受理され、1988年(昭和63年)に認可されました。

当時、看護学における博士課程はわが国では皆無であり、また看護学が博士課程を必要とする学問であるということを文部省や大学設置審議会の方々にいかに理解して頂くかに最も多くの労を費やしました。

そのひとつは、看護が博士課程を必要とする学問であることを説得できる文章を作ることで非常に苦心しました。日野原先生は、「もっと易しく、もっと解りやすく、そんなに固い言葉を並べないで」と言われますが、固い言葉を並べないとまるで平易になり、固い言葉にすると何かとってつけたようになります。

そして、検討を重ねた結果、看護学は「人間の全体を生活体と考えて、人間(個人および集団)が健康問題に生活を適応させ対処せうようにする看護援助の理論と方法を追求する学問であり、生態学的、行動科学的、社会心理的、比較文化的、成長発達の諸知識を学際的に統合して研究をするという特色を持つ実践科学である」としました。

しかし、このことは既に確立した学問体系をもつ人々にはあいまいで理解しにくいものでありましたが、時の流れとして発展的に考え、看護学に博士課程の設置を許可することが必要であるという気風ができていったようです。

文章の関門の次は、実地審査(視察)での諮問です。これは、禅問答のように審査員からの質問を受けるのです。日野原先生は、大変心配され人の配置やどう答えるかを

検討されました。ところが、審査に来られる方が一人を質問攻めにすると伝わってきました。

案じていたように当日、研究科長を予定されていた私に質問が始まりました。「ご質問を承りますが、解らないことは他の者がお答えいたします」と申しますと、「いいえ、あなたが研究科長になる予定ならあなたに質問をします。解らない人が研究科長になれるわけがない」とおっしゃられました。私は、血の気がひきました、学長はじめ周りの方も一瞬びっくりしたと思います。約1時間にわたる質問で、途中で途方に暮れました。そして、心の中で質問に答えられない人間を研究科長にしなければならない学校ならばやっぱり博士課程は無理であり、私の責任ではないと思なおしました。そこで、「私は、小児看護の専門家として自負しております。これからの質問は、小児看護の例でお答えします」と申し上げました。臨床経験が多く、実践の強みを例に質問に答え諮問が終わりました。

人に聞きますと、審査員の方は「解ったようで解らなかった」とおっしゃったそうです。最後の文部省の判定会議で小差で認可されました。看護をいかに人に示すかの難しさと、看護の実践経験の重要性を身をもって知らされました。

【新校舎建設】

1987年より聖路加メディカルセンターの再開発計画の中で、大学をどうするかを亡くなられた檜垣先生と学部長に就任した時からはじめました。

私は、プロジェクトチームを提案しました。みんなに一定の予算があること、共通性、教育性を考えること、将来性を明確に示すこと、公平であることを伝え、部門にとらわれず、教育がどうあるべきかという発想で各部門よりメンバーをだし、共同で考えました。そして、各部門に益することだけを考えるのではなく、全体を考える気風が見事に作られました。

新校舎をご覧になられて、新しいようで、しかし、受け継がれてきた聖路加の気風が残っていると感じて頂ければ嬉しいです。建物自体は、機能的で素晴らしくなりました。多くの方のご寄付とご厚意で出来ました。

【おわりに】

私は、聖路加の今までの気質の中に愛のある行為を実践するということがしっかり身に着いていると思います。聖書の中にあるサマリア人が、強盗にあって傷ついた人を世話をしてそっと帰ったというのに代表されるもので、それは高く評価されていたと思います。

しかし、博士課程を有する看護教育機関としてはそれだけではすまされないのです。私たちは、この看護実践を研究活動を通して世の中に示していく責任と役割が課せられていると思います。聖書的に言えば、私たちはその場におかれていると言えます。

この学会が聖路加の看護をきちんとしたものに整理し、世の中に示していく責任を果たしていかなければならないと考えるのであります。

〈参考文献〉

- 1) 聖路加看護大学学生便覧, 1996年度入学生
- 2) 50年史編集委員会: 聖路加看護大学50年史, 1970
- 3) 創立70周年記念誌編集企画委員会: 聖路加看護大学70年, 1920~1990, 1990
- 4) 金子 光編著: 初期の看護行政, 日本看護協会出版会, 1992
- 5) 金子 光: 看護の灯高くかかげて, 金子 光回顧録, 医学書院, 1994
- 6) 常葉恵子: 聖路加看護大学, その1創立期から専門学校時代, Quality Nursing Vol(1)1, 68-73, 1995
- 7) 常葉恵子: 聖路加看護大学, その2終戦直後から短期大学時代, Quality Nursing Vol(1)3, 66-72, 1995
- 8) 中村徳吉著: トイスラー小伝, 聖路加国際病院, 1968
- 9) 日野原重明: 極東における看護教育, その1(1921-1930), 聖路加看護大学紀要, Vol(10), 1-10, 1984
- 10) 日野原重明: 極東における看護教育, その2(1921-1941), 聖路加看護大学紀要, Vol(11), 1-12, 1984
- 11) 前田アヤ: 聖路加看護大学 その発足と歩み, (その1 1920-1941), 聖路加看護大学紀要, Vol(5), 1-27, 1977
- 12) 前田アヤ: 聖路加看護大学 その歩み, (その2), 聖路加看護大学紀要, Vol(7), 1-14, 1980
- 13) 湯楨ます: グロウイング・ペイン, 拓けゆく看護のなかで, 日本看護協会出版会, 1988